

京都

職人

匠の

てのひら

京都造形芸術大学
高階秀爾 / 大野木啓人 監修

サクラエディトリアルワークス 編著

継いでくれ

とは、よういあんなわ。

伝統工芸を受け継ぐ

京都の名工50人の

「技」と「半生」。

美しい写真とともに

綴る「職人の世界」。



京和傘

西堀耕太郎

和傘は平安時代、高貴な身分の人を強い日差しから守るために使われていた。江戸中期に入り、竹の骨作りや骨組み、和紙貼りなど分業化され量産が可能になる。それまで一般的だった蓑や合羽に取って代わり、携帯に便利な雨具として使われた。明治時代に入り始めた洋傘が工業化で大量生産されるようになると、今度はその地位を取って代わられる。現在、京都で唯一和傘を作っているのが西陣に拠点を構える日吉屋だ。日吉屋の当代、西堀耕太郎さんは和傘を現代に生かそうと取り組む。



中川利春
中川竹材店

世に見せることもひとつの商売。それが次の世代に生きろかもわからんし、そういうことにも手を出していく必要がある。



その尺度は、いつも持つことに意味があるという。いつ、どこで、それが試される日が来るかわからないからだ。

「生きてる間に三回チャンスが来ると思ってます。みんなこれは平等にあると。日々そういう思いで生きてたら、日常の中に見逃せへんやろうと。来たときにわかるやろうと」。

時には、採算を考えないで物を作ってもいい。その挑戦が、新たなチャンスを生むきっかけとなる。「コストが高くつくとか、そんなんええやん。『売れるから物を作る』というのほもちろんええことやけど、売れなくても『そういうのもできるよ』というのを、世に見せることもひとつの商売。それが、もしかしたら次の世代に生きるかもわからんし、ほかされるかもわからん。生活するうえで、自分が採算取れる範囲で問題なければ、そういうことにも手を出していく必要がある。竹が面白いんやない。竹の世界を面白くしてる。それは、自分で意識していかなあかんことやね」。

西堀さんは一九七四年の和歌山県生まれ。英語塾を営む家で育った。高校を卒業後、海外でのワーキングホリデーを経験し、帰国後は地元のホテルで働いた。地元自治体が英語のできる職員を募集しているのを見て市役所に転職。観光を担当する部署でイベント開催や観光案内ホームページの作成に携わっていた。

和傘の存在を知ったのは、友人から紹介された女性と結婚したことがきっかけだ。妻は日吉屋の次女だった。妻の実家は二人姉妹。長女は既に結婚し、夫の仕事の関係で海外に住んでいる。「かといって僕が日吉屋を継ぐというところで結婚したわけではなかったんです。結婚してしばらくした時、妻の実家で（和傘作りを）やる人間がいなくなつて、「もう店を廃業しようか」と相談していることを知った。店に行つて和傘を見ると「渋い味わいのいい傘だな」と思った。それで和傘を廃業してしまうのはもったいない、なんとかならないか、と考え始めたのが継ぐきっかけになった。

どうすればいいかを考えているいる思索をめぐらす中で西堀さんは「和傘を再興する」可能性はあるな」と思うようになる。「なぜかと言えば、僕が自分で傘を聞いて持ってみて「渋いなあ」と思ったから。若い自分がいいと思うなら、同じ年代の人で同じような価値を見出す人が他にもいるだろうと考えた」。

その可能性を実現するにはどうしたらいいか。西堀さんは京都の大学に通っていた自分の弟に相談する。弟に相談する中で当時普及し始めたばかりのインターネットを使うことがいいのではないかと考える。すでに和傘を

インターネットで地理的な壁を乗り越え、和傘を渋いと感じる人に直接訴えればいい。

作っている店は少ない。インターネットで地理的な壁を乗り越え、和傘を渋いと感じる人に直接訴えればいい。西堀さんは弟と一緒に作成ソフトを使ってホームページを手作りした。九七年ごろのことだ。ホームページを公開して最初の一ヶ月目、日吉屋の作る番傘が一本売れた。

「正直に言つて、最初はホームページで販売しても売れるのかと疑問に思った。和歌山から京都に移住しても、和傘の仕事がダメだったときには、弟と一緒にホームページ作成の事業を立ち上げようかとも相談していた。和傘をいいとは思つたものの、どうしても難がなまやダメというわけではない。技術や伝統があつても生活が成り立たなかつたらダメです」。

「実際、妻の実家からも「興味があるなら憶えたらいいけど食つていけない。公務員をやつてるなら公務員を続けたほうがいい」と言われた。でも、最初の月に番傘が売れたことで、可能性があるなど感じていたのが確信になつていった」。

“通い”の修業

ホームページ作りに並行して西堀さんは、和傘作りの修業にも取り掛かる。西堀夫妻が当時住んでいたのは和歌山県東部の新宮市。特急を使うと京都からおよそ四時間かかるところだ。西堀さんは市役所の勤めを続けながら週末に京都へ出てきて和傘作りを学んだ。まず金曜日の夜。仕事が終わると車を使って京都へ向かう。土曜日の朝に京都へ着く。それからすぐに和傘作りを始める。土曜日、日曜日とも終日にわたつて和傘作りを学ぶ。そして日曜日の夜、京都を出発し和歌山・新宮に向かう。月曜日の朝に新宮市に着くとすぐに市役所の仕事へ向かう。「公務員だったので兼業禁止規定があるんです。あまりおっぴらに和傘の仕事をしているとはいえなかつたんで

すけど家業の手伝いということで大目に見てもらいました」。

妻の実家で修業を始めたといっても、仕事を覚えに来た頃は文字通り誰も教えてくれなかった。先輩の職人が仕事をしているのを見聞きし、自分なりに覚えるしかない。仕事をしている様子をビデオで撮影し、傘作りのポイントを自分なりにノートにメモした。特に祇園祭に使う特殊な傘などは克明なメモを残した。修復の依頼が来ても次に仕事ができるようにする為だ。

「みんな悪い人ではないから聞けば教えてくれる。だけど懇切丁寧に教えるわけではない。だからこちらから無理やり聞き出したこともありましたよ。中には仕事場に来るなり「仕事の」気が乗らない」といつて二十分そこでその日の仕事を終えてしまう職人さんもいた。そんな中で仕事のことを聞き出すのは苦勞した」。

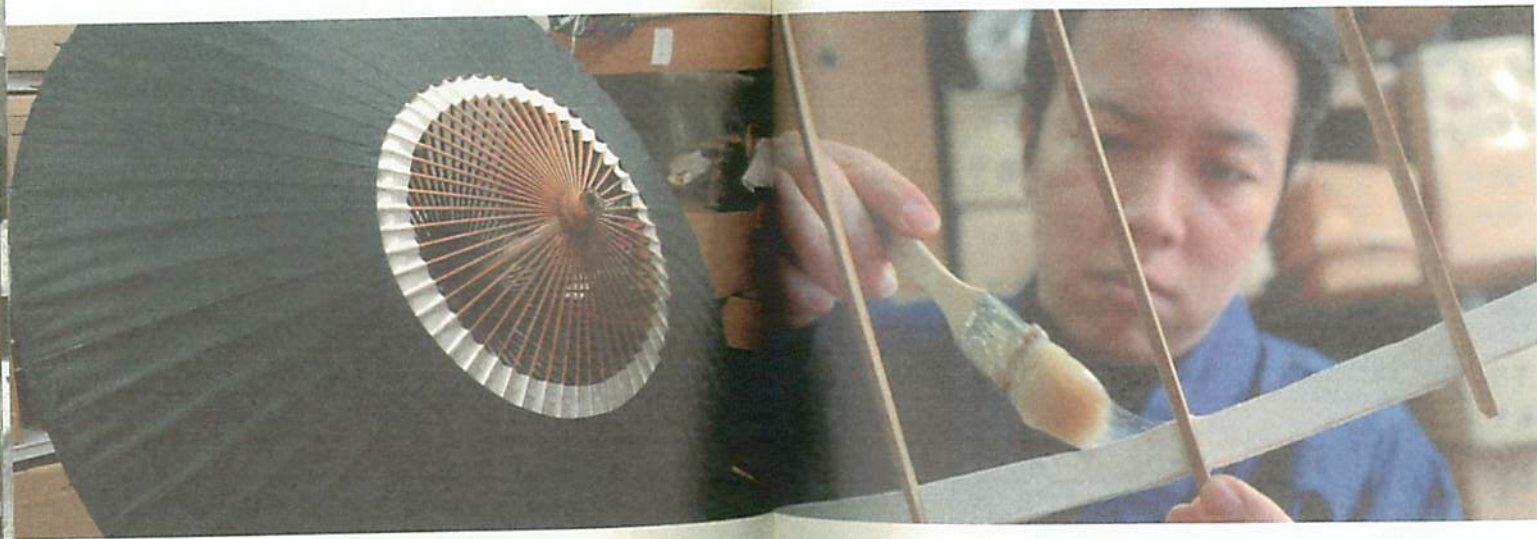
和傘のこと

和傘の最盛期は明治初期といわれている。当時、京

都だけでも二〇〇店舗が製造販売を手がけていたともされる。現在、京都で製造販売を手がけるのは日吉屋だけ。全国でも和傘作りができるのは十軒程度。ほとんどは家内工業的に和傘作りをしているだけだ。

戦後、工業化によって安い洋傘が大量生産されるようになる。ビニール傘など安価な傘は近年、中国などで作られている。洋傘は、値段が安くなくなっただけではなく、軽量化が進み、強度や耐久性の面でも和傘に比べて優位に立っている。

日吉屋も戦後は、和傘だけでなく洋傘も扱っていた。和傘を作ってもなかなか売れない時代に入ったため、大量生産された洋傘を仕入れて販売したほか、カッパやレインコートなどの雨具を販売する洋品店として営業を続けた。洋傘販売を手がけつつも和傘も作る店として日吉屋が生き残ったのは、地の利が働いた側面が大きい。日吉屋は京都市上京区の西陣の一角にある。歩いて数分もしないところには表千家、裏千家の両家元の庵がある。日吉屋は屋外で開かれる茶会「野点」に使われる大きな和傘の注文を両千家から受けてきた。



和傘作りの技

和傘はもともと、壊れたり、破れたりすることを前提にしていると西堀さんはいう。和傘は竹に貼った和紙に亜麻仁油を塗り込ませてある。この亜麻仁油が水をはじき、雨具としての役割を生み出す。普段使っていて防水効果が薄れたり、破れたりすることは無いものの、数百年の時を経ていたり、壊れたりすれば代わりの竹や和紙を使って直す。江戸時代には壊れたり破れたりした和傘を引き取り、修理したうえでリサイクル品として売り出す専門の業者もいたという。

和傘作りはおおざっぱにいうと、一本の竹を割って作った骨を傘の形に組み、型紙どおりに切った和紙を貼り、乾燥させ、亜麻仁油で防水処理を施して作られる。

竹の骨は専門の業者に加工してもらったものを使う。この竹の骨をタコ糸で、傘の形に組み上げていく。このとき竹の骨に空いた穴に糸を通すのに使われるのが口付けと呼ばれる手法だ。針穴に糸を通して、穴から出た部分と糸とを縫る。その上に滑りをよくするための蠟を塗る。この針で骨の穴に糸を導く。導いた後、糸から針を引っ張ると簡単に糸が針から離れる。簡単に見えてコツが必要で和傘作りが初めての人はこれを習得するまでにしばらく時間がかかるという。

和傘に使う材料はどれも自然物であるため、細かい部分で合わないところも出てくる。そうした細かい部分を「うまく手加減で合わせていくのが和傘職人の腕の見せ所」と西堀さんは話す。例えば和紙を骨組みに貼るとき、和紙に霧吹きで水を含ませ、糊で貼る。和紙が乾いたときには張りが出る。この湿らせ具合により平面でも立体的に貼れるわけだ。また、貼る和紙は型紙を使って切っているが必ず端を余らせている。和紙が当たる竹によって微妙に必要な和紙の線が変わるからだ。最後に剃刀で余分な部分を切り取る。



口付け
写真には糸に縫いをかけている様子

野点の傘
基道家元御用達本式野点傘「龍傘、段張赤白、段張緑白の三色があり、大きさは二五尺(直径約一・六メートル)〜五尺(直径約二・九メートル)までの四種類があり、骨日は五十一、七十本、茶器での利用だけでなく英国リサベス女王など国賓を運ぶ際などにも多く使われている。

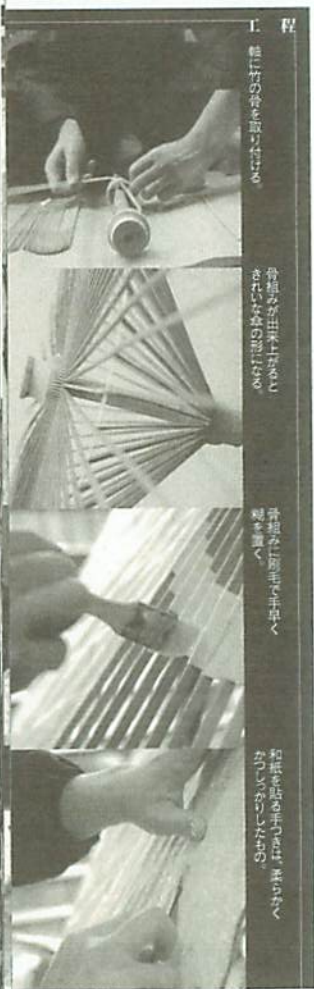
亜麻仁油

亜麻仁から搾った油。黄色ないし褐色の乾性油。塗料やワニス、印刷インク印内、リノリウムなどを製造するに用いる。

新商品の開発

ホームページで認知度を上げ、和傘作りも習得して日吉屋を継いだ頃、ある造船会社からの注文が舞い込んだ。注文内容は、船を買う海外の得意先に配る和傘を作ってほしいというものだった。またあるときには大手自動車メーカーからの注文も舞い込む。国際会議を開く際に、招待客にお土産として和傘を配りたいというもの。このほかにも酒造メーカーや航空会社、老舗旅館などから上得意の客に配ったり贈ったりする和傘を作ってほしいという注文がくるようになる。

こうしたニーズを出発点に、西堀さんは「和傘の新しい用途を開発していきたい」と意気込む。「伝統工芸といっても(作り手が)食べられる環境があつてこそいいもの。より良いものを作ることに加え、新しい和傘の使い方を提案して経営的な取り組みを活性化させるのも僕の大事な役割だと考えている」。二〇〇五年秋、あるアーティストが日吉屋を訪ねてきた。花を使った大胆な作品を発表する世界的に



程

Ⅰ 紐に竹の骨を取り付ける

骨組みが出来上がり、きれいな傘の形になる

骨組みに糊を塗って手早く糊を置く

和紙を貼る手つきは、まろやかに仕上げられたもの

有名な人物だ。新しい作品に和傘を取り入れて使いたいという。

「傘のシンプルさと色合いが洗い、とって評価してくれた。やっぱり、(和傘の) 洗みをいいと思ってくれる人はいるわけです。そこから発想が広がって、今は自分なりにアートに近い和傘の作品を作ってみたいと考えるようになった。そもそも和傘作りは自然物を相手に人間の手でする仕事。一つ一つの傘に個性と違いがあるから一〇〇%満足することはない。自然の木を使えば、そんな和傘のことを表現できるのでないかと思う。何より問題は、やってみたくて仕事に追われて実際に作る時間がないことですね」



にしむら まさまさ
西村 博太郎
日吉屋

自分なりにアートに近い和傘を
作ってみたいと考えるようになった。



京石工芸会

西村 金造
西村 大造

京石工芸品の歴史は古い

平安建暦に際して石工芸が求められ

その後の仏教の広がりに伴い、技術が発達したと
考えられている。権山時代以降には、

茶道文化の広がりとともに、さらに京石工芸の

技術は洗練された。そんな京石工芸を手がける

西村石灯呂店の西村金造さんは、

金沢・兼六園にある石灯籠の作者でもある

人との出会いが、西村さんをものづくりに

突き動かしてきた。その京石工芸の技を

金造さんから受け継いでいるのが、

息子の大造さんだ。父の金造さんにもつくりへの

こだわりを、工房を切り盛りしている大造さんに

京石工芸作りの工程などを聞いた。